



本当の”自分”と出会う。

えはら 荏原 温子さん（フラワーショップ花・色・デザイン研究所店主）

看

板のない花屋さん。大通りから一歩入った先に、美しい日常が隠れています。荏原さんが30年来の念願であったこのお店を始めたのは、2024年1月。荏原さんが63歳のころでした。

小さいころから植物が好きだった荏原さんは「お小遣いやお年玉を植物図鑑に使ってしまうほど。このころから大学は農学部に進むだろうなという思いがあり、実際その歳になると農学部に進学していました」。ただ、その後システムエンジニアとして就職し、植物に触れる機会があまりなく、結婚や出産を経て、32歳の時に転職が訪れました。「32歳のころ、もともと植物が好きだったこともあり、子育てもある中、週一回花屋でアルバイトをすることとなりました」働き始めた初日、お店の中に広がる香りや色とりどりの花の数々に荏原さんは圧倒され、「これが私の天職だ」と思い、花屋さんになると決心しました。

ただ、花屋さんになりたいという夢がすぐ叶うことはなく、娘を育てるために、花の専門学校で講師を掛け持ちする日々が続く、自分の夢から一時的に距離を置くこととなりました。しかし、花屋になりたいという思いが消えることはありませんでした。

そこから月日が経ち、「花屋を開くことを決めたのは、娘が大学を卒業し、還暦を目前とした頃。夢をかなえるのは今しかない」と思い、店舗をオープンしました。

ました。

このお店には、荏原さんの長年の思いが随所にみられます。その中でも、「花色コーティング」という講座には、「自己実現」をしてほしいという願いが込められており、「多くの人は、家庭や職場など周りの環境や一般社会通念に、気付かないうちに縛られている人が多いと感じます。この講座では花を介して自己表現をするため、自分の心を癒すことができるだけでなく、本当に自分がどうしたいのか、本当にしたいことは何なのか、自分自身と対話できる特別な時間なのです」と力強く語ります。

「お店を始めて、お花の仕入れや集客でまだ思い通りになったことはない」と話す荏原さん。「ただ、そこには悔しさとやりがいがある。思い通りに経営することが今の目標なので、体が動かなくなるまで経営を続け、良い形を追い求め続けたい」と力強く語りました。難しさを抱えながらも、自分やお客様の夢を叶えるために働く素敵な姿がそこにはありました。



▲お店の外観の様子
「庭を見ながら、皆さんが自分の夢を語れるようなそんな空間を作れたら」と語りました。